



Title	アール・ヌーヴォーからみた服飾
Author(s)	川中, 美津子
Citation	デザイン理論. 1992, 31, p. 84-85
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52985">https://doi.org/10.18910/52985</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## アール・ヌーヴォーからみた服飾

川中美津子

1980年代から第1次大戦の始まる1914年頃までのヨーロッパは、緊張を内包しながらも比較的平和を保ち、科学・技術面における著しい発展や産業革命の成功、相次ぐ万国博覧会の開催、そして海外への進出という繁栄を迎えた時期である。ちょうどこの時期に、芸術の面においては、従来の絵画や彫刻という分野だけでなく、家具や織物、印刷物など日常の身のまわりの物を含めて装飾芸術として展開した芸術活動がアール・ヌーヴォーである。アール・ヌーヴォーという用語は、本来1895年にパリに開店したサミュエル・ピングの美術店の名前に由来するものであるが、この様式は、ドイツではユージェントシュティル、イタリアではステイーレ・リバティ、スペインではアルテ・ホベンなどと呼ばれ、ヨーロッパの各地でそれぞれの特徴を持ちながら花開いた。

ホイッスラーのデザインによる「ピーコック・ルーム」(1877~78)やA.H.マックマードの「シティイ・チャーチ」の扉絵(1883)などは初期のアール・ヌーヴォーのシンボルとも言えるものである。また1880年代以後のガレやドームによる数々のガラス作品には強い自然への愛着や日本文化の影響が伺える。W.クレインの挿絵や多くの作家によるアクセサリーや家具には人間と植物と動物が流れる曲線によって、ひとつに融合する傾向が顕著に現われる。V.オルタやH.ギマールらの作品には、鉄という素材の伸長性と新しさの発見がある。

鉄の伸長性を石にも要求し、鉄と共に活用したのがスペインのA.ガウディであろう。また一方、C.R.マッキントッシュの「グラスゴー美術学校」(1897~99, 1907~09)やウィロー喫茶室のドア、J.ホフマンの「ストックレ邸」(1903)などは建物の幾何学的な形態による簡潔さを表現するものである。アール・ヌーヴォーは、動・植物をデザイン・ソースにししながら、日本を含めてヨーロッパ圏外への興味を持ち、曲線のもつ装飾性とそれを内包した直線の装飾性を表現するものである。

服飾において、1860年頃に絶頂に達したクリノリン、それに続くバサルのスタイルは、1890年前後には前に突き出した胸と後に引いた腰、脚にまとわりつき、裾で後にトレーンを引いた『Sカーブ・ライン』となって女性達に着用された。それはコールセットで胸と腰をぴっちり形づけ、後部に引いた腰から床に垂れ下がるスカートで、横から見ると、女性の身体を『S』字に創りあげるものである。1906年以後、ポール・ボワレはそのコールセットから女性の身体を解放し、その動きに多くのデザイナー達が追隨している。

では、アール・ヌーヴォーの作品の中に服飾はどのように表現されているのだろうか。アール・ヌーヴォーより少し早い時期のD.G.ロセッティやE.C.バーン・ジョーンズなどラファエロ前派の人達は、クリノリンやバサルの全盛の時期に、コールセット等により、身体を緊縛することのない、

ハイ・ウエストでゆっくりとした、自由なシルエットの服飾で女性を描き出している。T. ロートレックは数多くの絵画やポスターの中に、ウエストを細く形づくり、スカートの裾を長く引いた女性や、アメリカ生まれで、長くひだの多いヴェールに身を包み、その踊りは空中に舞うスパイラルのようだと評されたロイ・フラウを多く描いている。しかし、それらは必ずしも『S』字に堅苦しく形づけられた姿ではない。また、「メイ・ミルトン」のポスター（1895）では、現在でいうA・ラインのドレスを着た女性が描かれている。J. シェレのアイス・スケート場のポスターはウエストを細く縛めた、当時の服飾を着用しているが、『S』字に身体を形づけるコルセットでは歩行すら困難な場合があるにもかかわらず、裾を翻してスケートをしている女性の姿である。アール・ヌーヴォーの芸術家として知られるA. ミュシャの作品の数々にも『Sカーブ・ライン』の女性は登場せず、G. クリムトの作品にも『Sカーブ・ライン』のスタイルの女性を見出すことは、ほとんどできない。それに反して、A. マイヨールやG. ド・フルのタペストリーには、細いウエスト、前に突き出した胸、ゆったりした裾幅のスカート等、当時のスタイルがみごとに表現されている。

では実際の女性達は何を着ていたのだろうか。1890年頃からのファッション・プレートやパキャンやレドファンなど有名デザイナーが発表した作品は完全に『Sカーブ・ライン』の服飾である。一方、1860年頃、すでにウィリアム・モリス夫人はコルセットをつけないドレスを着、1896年にはH. ヴァン・ド・ヴェルドも同様のドレス

をデザインしている。1904年ポール・ボワワレは「孔子」と題する中国風のドレスを発表し、1908年『ヘレニック・ドレス』で完全にコルセットを排除する。彼は同年に、極端に裾幅が狭く、両足をそろえて跳んでいる様子が諷刺的に描かれるホップル・スカートを生み出した。

アール・ヌーヴォーの芸術作品と同時期の服飾とをみると、肖像画としての意味が薄れると共に、新しさを表現する為に、必ずしも当時の服飾をそのまま表現しているとは限らないように思われる。同時にファッション・プレートという服飾を伝える為のものは『Sカーブ・ライン』と、それに続く『ヘレニック・ドレス』に代表されるストレートなシルエットを示している。『Sカーブ・ライン』そしてポール・ボワレへと続くこの時期の服飾は、諸芸術の場合と同様、曲線のもつ装飾性と直線のもつ装飾性を表現しているといえよう。

かわなか・みつこ 成安女子短期大学  
1992. 3. 21 第27回被服分科会